

「ライン川で」、「即興曲」、「月の光」、「ウェストミンスターの鐘」と曲名を並べたら、ピアノ演奏会のプログラムに見えるかもしれない。この4曲はフランスのオルガンニスト、ピエールが作曲したオルガン独奏曲「24の幻想的小品集」からの抜粋で、オルガンサマーナイトコンサート（6月9日、札幌・キタラ）で取り上げられた。演奏した第19代札幌コンサートホール専属オルガニスト、マルタン・グレゴリウス＝写真（キタラ提供）＝の解説によれば、4曲を交響曲の四つの楽章のように配したという。

# 音楽

グレゴリオスのオルガンコンサート

## 起承転結 交響曲のよう

「ガー」の荘厳さとは異質の情感があり、ピエール作品の魅力が堪能させた。

また、グレゴリウスはチェンバロの名手でもある。ミュージアム・コンサート（5月26日、札幌・本郷新記念札幌彫刻美術館）で聞かせたカプリエリの「カントォーナ」には、イタリア・ルネサンス音楽独特の詩情や懐かしさが横溢。オルガンとは奏法が異なるはずだが、一本芯の通った精緻な演奏スタイルは変わらぬ、チェンバリストとしてのグレゴリオスの資質にも感嘆させられた。

そのほか、今季は特色ある演奏会が実に多かった。まず、ア

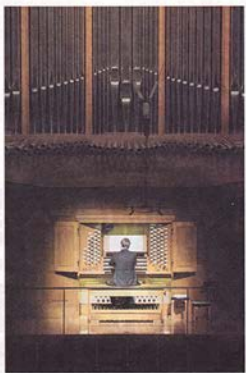
ルフレッド・テニスの物語詩にリヒャルト・シュトラウスが音楽を付けた朗読劇「イノック・アーデン」の日本語上演（4月5日、札幌時計台ホール）。

植田研一の語りと蘭治子のピアノ伴奏が絶妙に調和し、情味あふれる物語の世界が立ち上がった。関は2014年12月にも英語版「イノック・アーデン」を札幌で上演したが、今回はその時にも劣らない秀演といえる。

ピアノニスト館野泉はビオラ奏者ユバル・ゴトリホビチを伴ってリサイタル（5月18日、キタラ）。ゴトリホビチの「ピアノ」と左手のための「ソナタ」、谷川賢作の「Sketch of Janz 3」

など、「館野泉左手の文庫」一助成作品が披露された。左手だけでピアノを弾く館野の演奏活動は一層、充実度を増しているようだ。

11回目の札幌定期演奏会を行ったクアルテット・エクセルシオ（6月19日、キタラ）は成熟度を示したものの、ドボルザークの弦楽四重奏曲第12番「アメリカ」での音楽づくりはやや穏健にすぎる印象。フルートでシベリウスのバイオリン協奏曲を吹奏したテニス・フリアコフのリサイタル（6月21日、キタラ）は名技が圧巻だったが、音色に重厚さを望みたくなる場面も入り交じった。



6月、編集長・多田圭介（音楽評論家）プロデューサー・高橋肇（札幌大谷大学学長）による「さっぽろ劇場ジャーナル」が創刊された。タプロイド判4ページの創刊号は「バーンスタイン生誕100周年」、「札幌・バーメルト首席指揮者就任」などを特集し、鋭利な批評文を掲載。今後の紙面展開を大いに期待したい。（みづら・ひろし）北海道情報大教授